

見えるとわかる 現場の認識からともに描く 中山間地域の現状



令和 8年 5月 27日

株式会社たがやす

目次

1. 弊社について
2. 中山間地域の現状
3. 今、求められていること
4. 事例紹介
5. 地域は動く時とは
6. 地域計画の役割と期待

株式会社たがやすについて

たがやす 

私たちは一人ひとりが輝く土壌（環境）をつくり、
すでにあるヒト・モノ・コトを生かして、
新しい価値を生み出す伴走型のパートナーです。



設立 平成31年3月18日
代表 鈴木耕平
住所 富山県富山市小泉町 181番地
HP <https://tgys.co.jp/>



一人ひとりが輝く土壌をつくる

医療系の対話、**地域や集落の課題解決**、企業の課題解決
科学技術コミュニケーションを生かした社会実装支援

「対話の場づくり」と「見える化」の技術で コミュニティ課題解決に伴走しています。

tagayasu **7** step

※たがやすでは、こちらの7ステップを軸にプロジェクトや取り組みを進めています。



step01.

「なんとかしたい」人の「どうなりたい」を一緒に見つける



step02.

既にあるものを見つめる、支える、守る、周りへの橋渡し



step03.

コアチームにする



step04.

ホストチームになる



step05.

プロジェクトをはじめる、小さく試す



step06.

小さく閉じて良いものだけを残し、状態を維持する



step07.

たがやすが居なくても、当事者たちが自走できるように

対話とは

あるテーマの是非を決めるため議論や説得することではなく、
関係者がお互いの意見に耳を傾け、現状を共有することで、
新しい気づきと価値を創造すること

デヴィッド・ボーム (2007)『ダイアログ 対立から共生へ、議論から対話へ』英治出版



見える化とは（その一つの技術：グラフィックファシリテーション）

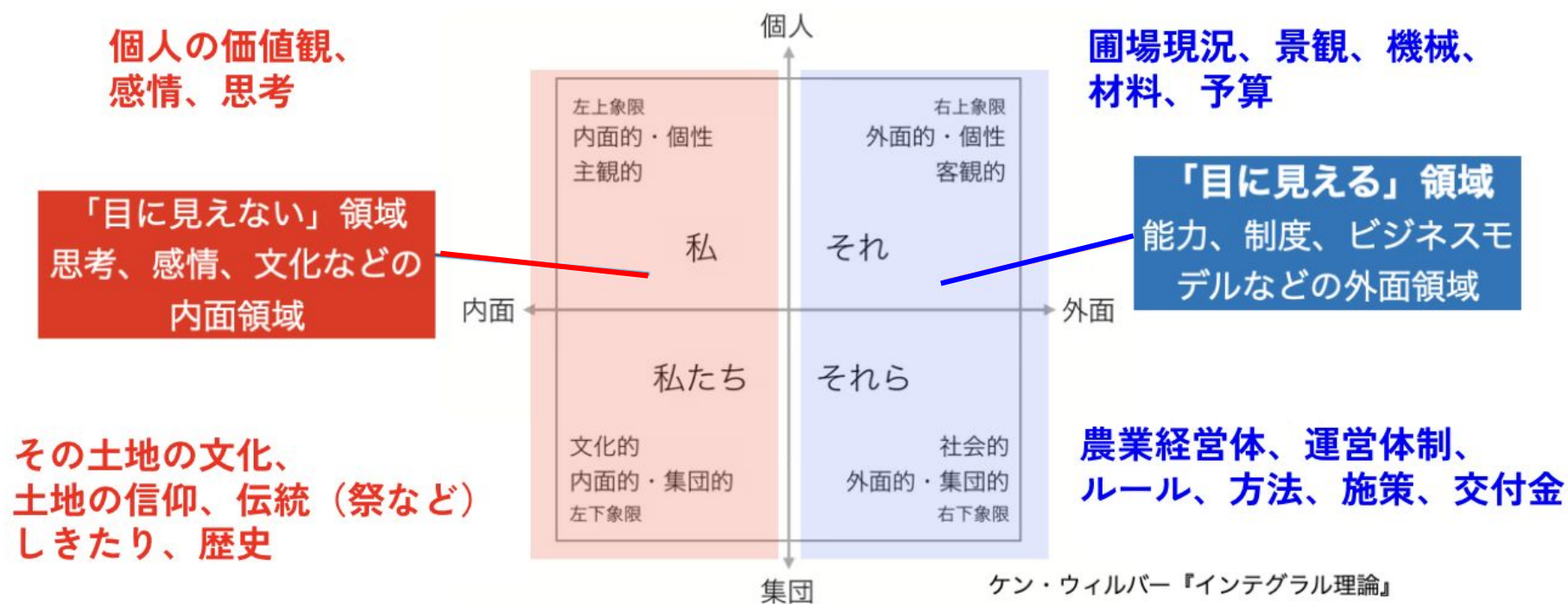


話し合いの内容を「事柄」だけでなく「話し手のトーンや表情」も同時進行で絵や色を使って描き出していく技術

プログラムデザイン、ファシリテートと組み合わせ、参加者の相互理解や議論の活性化に寄与する。



見えること、見えないことは影響しあっている
「目に見えない」領域を共有し、
扱えるようにするグラフィックファシリテーション



経緯

経緯

富山県氷見市内の「農村RMOモデル形成支援事業」「最適土地利用総合対策」における伴走支援の中で、住民による話し合いの場を支援。
その過程で、市担当者より「地域計画における話し合いの場づくり」について相談を受け、市内8地区を対象に地域計画策定支援業務を受託した。

中山間地域の現状

弊社が地域計画を策定支援した中山間地域（令和6年度実施）

- 市担当者が「話し合いの進行や合意形成に難しさがある」と捉えていた地域に対し、外部ファシリテーターとして参画。

地区	A	B	C	D	E	F	G	H
集落数	7	3	6	7	4	5	3	6
農用地等の面積 (ha)	321	67	277	396	207	250	297	237

- 勾配のある山際
- 水管理の課題
- 宅地と隣接し、地権者が分からない
- 集落間で管理体制が異なる

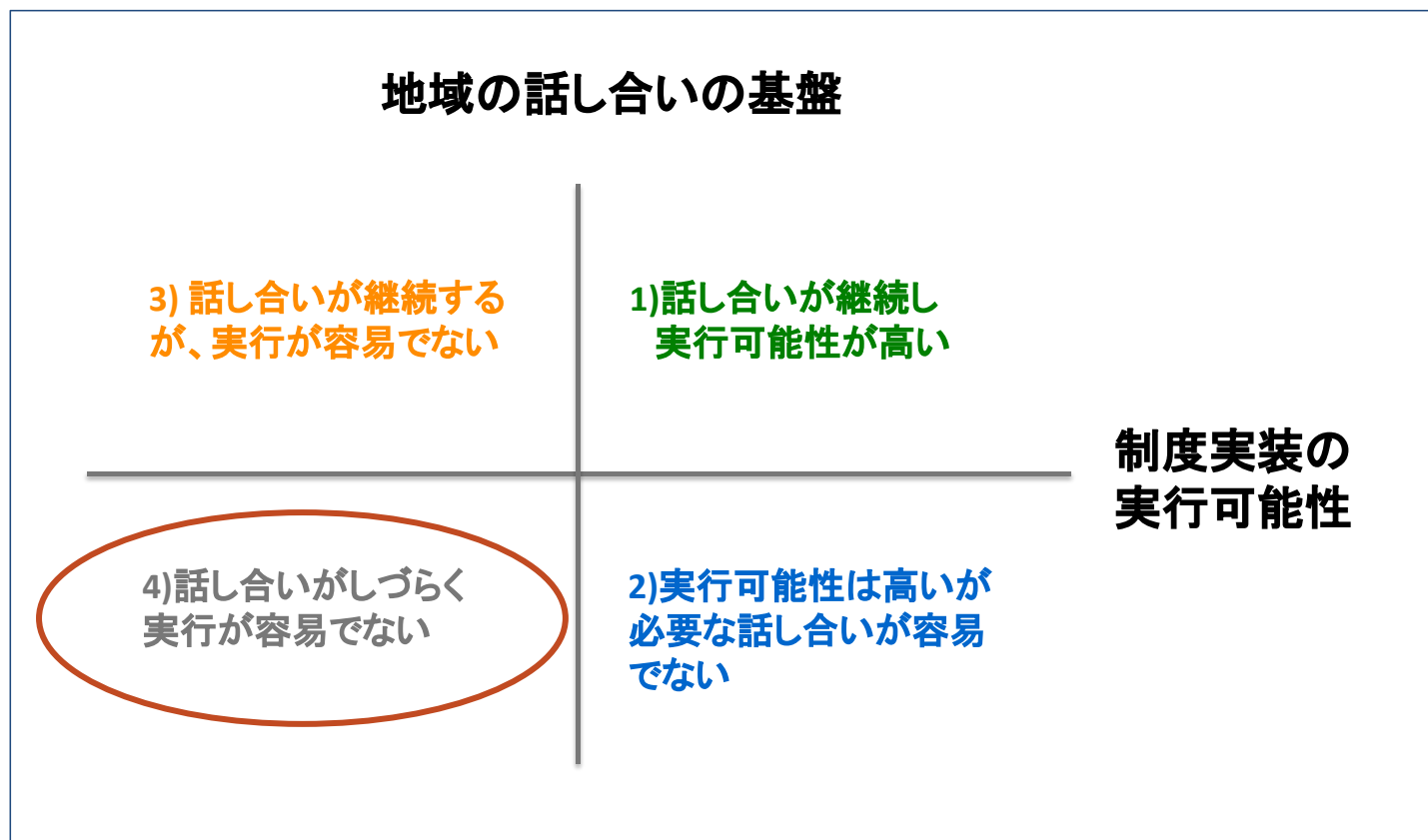


下記の地区は市担当者が担当

- 平場の稲作中心地域
- 一定規模の農地集積が進んでいる地域
- 地域農業の方向性が比較的明確な地域

中山間地域の現状

地域の実態を仮説的に整理する 4象限



※地区を評価するものではなく、
進め方の違いとつまずきを検討するために作成。

中山間地域の現状

地域計画は、本来「**地域での話し合いを通じて、形骸化しない計画を作る**」ことが求められている。

一方、そもそも話し合いの前提共有自体がなされていない

- 担い手不足
 - ・リタイア時期の傾向（地域風土、世代的価値観、採算性の影響）
- 条件不利地の増加
 - ・棚田地形による長大な畦畔と急勾配
 - ・水田が柔らかく深いため、大型機械の利用が困難。若手が引き継いでも、条件不利地では継続が難しい。
- 機械・水路等の老朽化
- 鳥獣被害の増加

現場では日々の維持管理や担い手不足への対応に追われている



- 集落内での話し合いが停滞気味
- 集落間の情報が共有されていない
（今後の意向、機械、補助金の使い方等）

中山間地域の現状

行政のリソース

- **市担当者1人が22地区を奔走**
➡市担当者から、農業委員・推進委員、県、JA、土地改良区へ声かけ
- 担当者も話し合いに誰に声をかけると良いか把握できていない
- どの段階で合意形成するか設計が困難
- 「とりあえず集める」所からのスタートになりがち

今、中山間地に求められていると捉えていること

- 現場条件が十分共有されないまま議論が進むと、反発や不信感につながりやすい
- 「誰が担うのか」だけでなく、「維持可能なのか」「維持するためのマンパワー以外の課題は何か」という実態把握が必要

実態共有の話し合いは、すぐに解決へ結びつくものではない。

しかし、厳しい条件下でも関係が続く仕組みをつくるために

**現場の知見や困りごとを
関係者間(地域・自治体・JA等)が同じ場で共有し合うこと自体が、
地域に主体を置きながら「一緒に考える」基盤になるのではないか**

今、求められていると捉えていること

農業者・住民・自治体・農業委員・JAと一緒に考えられる
「矢印の向きを変える介在」と「出口」

「きく」体制の構築

- 農業者をはじめとした地域の声を「きき切る」体制
- 継続的な話し合いの設定
- 自治体と支援者の役割分担

何を「きく」か

- 農地の現況だけでなく、背景にある「どう捉えているかなどの思い・考え」や「そう考えている理由・価値観」などの文脈を合わせて把握する。
- 共有できる記録媒体にし、続きから聞ける・話せる仕組みをつくる。

クッション役を超えた介在

- 「伝える」「受け取る」の一方向ではなく、矢印の向きを変えて、農業者・住民・自治体・農業委員・JAと一緒に考える「仕組み」として機能する。

後押しにつながる「出口」の紹介

- 話し合いの先にある選択肢や実践事例を共有し、次の一歩につなぐ橋渡し

事例紹介 一段階的に設計した3回の検討会

キック
オフ

取り組み内容の周知・理解 / 進め方の下調べ
※キックオフのみ8地区同時開催

1

取り組み内容の理解、現状把握
活用ツール: QGISで作成した圃場地図

2

課題や思いの共有
活用ツール: グラフィックファシリテーション

3

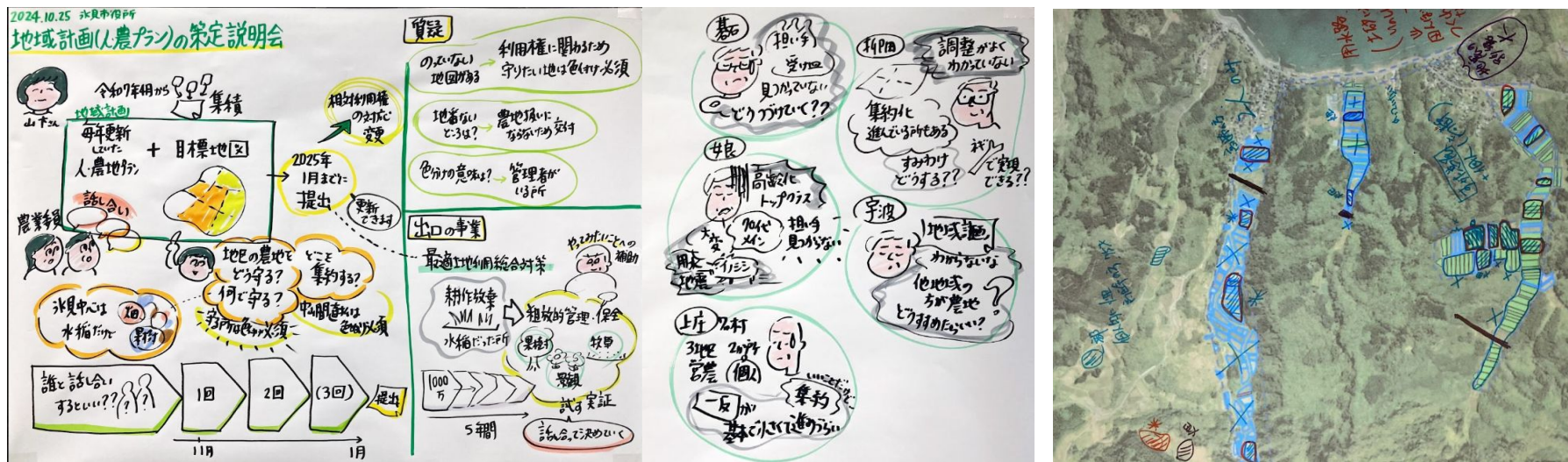
方向性の検討
活用ツール: 集合知の整理、出口事業の共有

キックオフ

取り組み内容の周知・理解 / 進め方の下調べ

目的 意図	<ul style="list-style-type: none">● 地域計画の概要や取り組みの進め方について理解を深める● 説明に対する参加者の反応や関心事項を把握する● 現状の地図で話し合いが機能しそうか確認する● 今後の取り組みにおいて、地区内で参加が望ましい関係者や担い手を把握する
地域参加者	農業委員、地域づくり協議会、営農代表者等、各地区3名程度
使用した ツール	<ul style="list-style-type: none">● 概要説明資料● グラフィックレコーディング● 農業委員会が過去に作成した地図

- 参加者の声をその場で可視化・共有することで、双方向の安心感を醸成
- 検討会で繰り返し掲示することで、取り組み経緯を思い出しやすくする



graphic by hirono tannaka

現状の地図では、道路情報等が古く、話し合いがしづらい場面が見られた。また、用意した地図から漏れている箇所の指摘や、大判印刷時に解像度が不足し、意見出しが停滞する様子も確認された。

➡ 集落ごとの話し合いがしやすいようにQGISを用いて集落単位の地図を作成

検討会①

取り組み内容の理解、現状把握

目的 意図	<ul style="list-style-type: none">● 無理のない形で、参加者それぞれが持つ暗黙知の可視化と情報交換のきっかけづくりを行う● 継続的に話し合いへ参加しやすい関係性づくりを行う <p>・話し合いが難しくなる背景や、地区内の不安・課題感を把握</p> <p>・現場で変化している営農実態や継続条件を収集</p>
参加者	<ul style="list-style-type: none">● 地域農業者(営農、個人)● 集落をまたいで活動している法人営農● 農業委員・推進委員、県、JA、土地改良区
使用した ツール	<ul style="list-style-type: none">● 農業委員が作成した圃場地図● QGISで作成した圃場地図
方法	<ul style="list-style-type: none">● 地域計画の概要や目的を共有する● 地図を用いて、各集落における最新の圃場現況(農地、草刈り保全、荒廃等)を記録・共有し合う● 圃場ごとの管理体制や営農条件、作業のしやすさ等を、地図と紐づけながら聞き取る

- 事業説明時には、「すぐに解決や支援につながるわけではない」という声が挙がる地域もあった。
- 一方で、まずは地域の現状を共有する取り組みとして参加・協力が進められた。



- 地図を介して、検討会終了後も地域内・関係者間で情報共有が継続する様子が見られた。
- 集落内での話し合いに活用するため、地図の持ち帰りを希望する声もあった。

検討会②

課題や思いの共有

目的	<ul style="list-style-type: none">● 第1回検討会で共有・記録した内容を反映した地図をもとに、地域の現状認識を更新・共有する。● 保全管理の課題や荒廃の背景、地域内で工夫していることや前向きな取り組みについて、集落間で率直に共有する。● 挙げられた課題や可能性に対し、JAからの協力可能な視点や、自治体から制度・支援につながる視点を共有することで、一方向的な共有ではなく、関係者が「一緒に考える」対話の時間となるよう設計。
参加者	<ul style="list-style-type: none">● 地域農業者(営農、個人)● 集落をまたいで活動している法人営農● 農業委員・推進委員、県、JA、土地改良区
使用したツール	<ul style="list-style-type: none">● QGISで作成した圃場地図● グラフィックファシリテーション

グラフィックファシリテーションについて

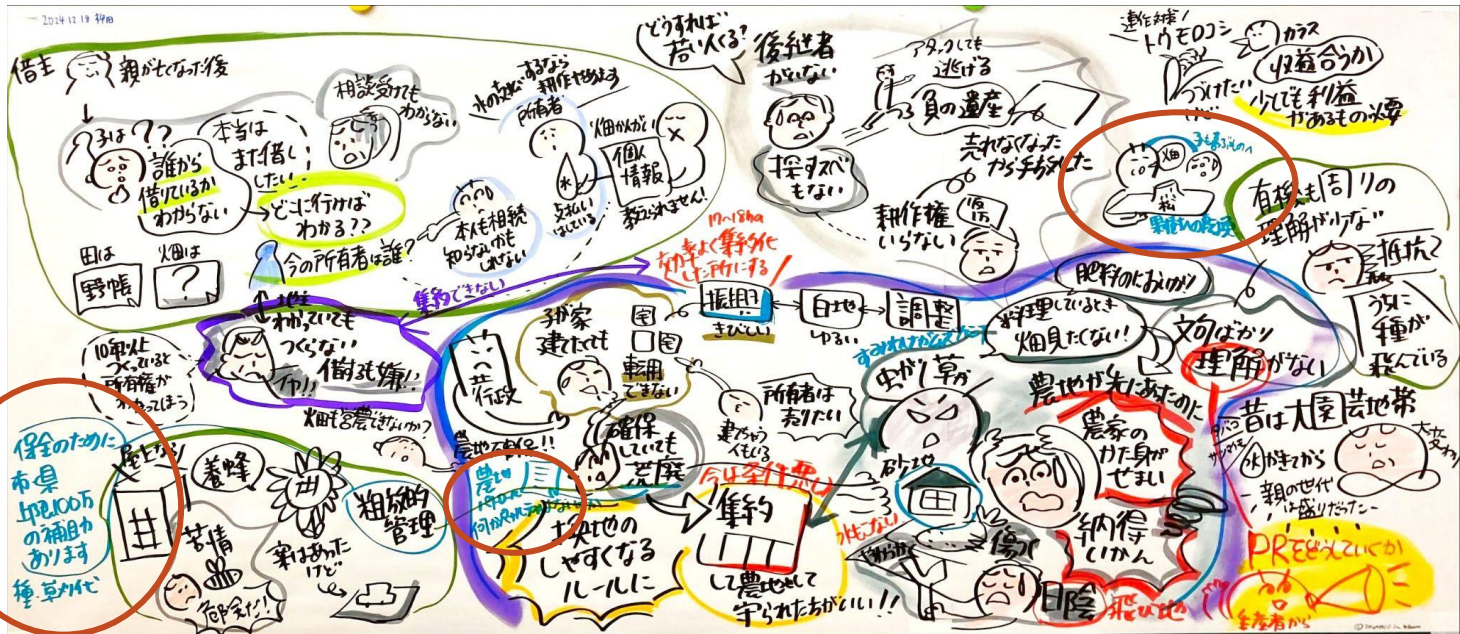
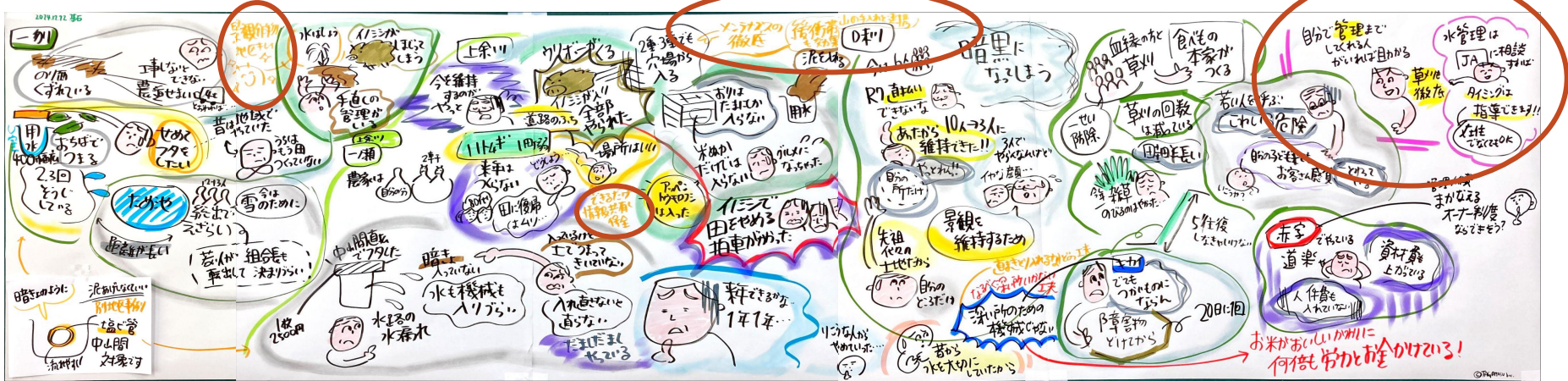


話し合いの内容を「事柄」だけでなく「話し手のトーンや表情」も同時進行で絵や色を使って描き出していく技術

プログラムデザイン、ファシリテートと組み合わせ、参加者の相互理解や議論の活性化に寄与する。



- 可能な限り、「話した言葉のまま」「話し手の温度感をのせて」描くことで背景や文脈を合わせて共通認識化し、安心感を醸成。
- 地域住民だけでなく、自治体担当者やJA担当者の意見も重ねることで、関係者間と一緒に考える仕組みとした。



参加者の声の可視化・共有を通じて見られたこと

- 参加者の声(見える情報・見えにくい情報)をその場で可視化・共有することで、**他者の意見を受けて新たに発言する参加者が見られた**。
- 集落間をまたいだ「**地区**」としての**対話の場づくり**につながった。
- 対話を通じて、自治体側が「**地域で力を入れている作物**」と認識しているものでも、**地域側からは必ずしも前向きではない意見が挙がるなど、認識のズレを共有する場面**が見られた。
- 宅地に近い地域では、複数地区を合同開催することで、「**集積を進めるなら別地区の方が適しているのではないか**」といった**広域的な視点**も共有された。

一方で

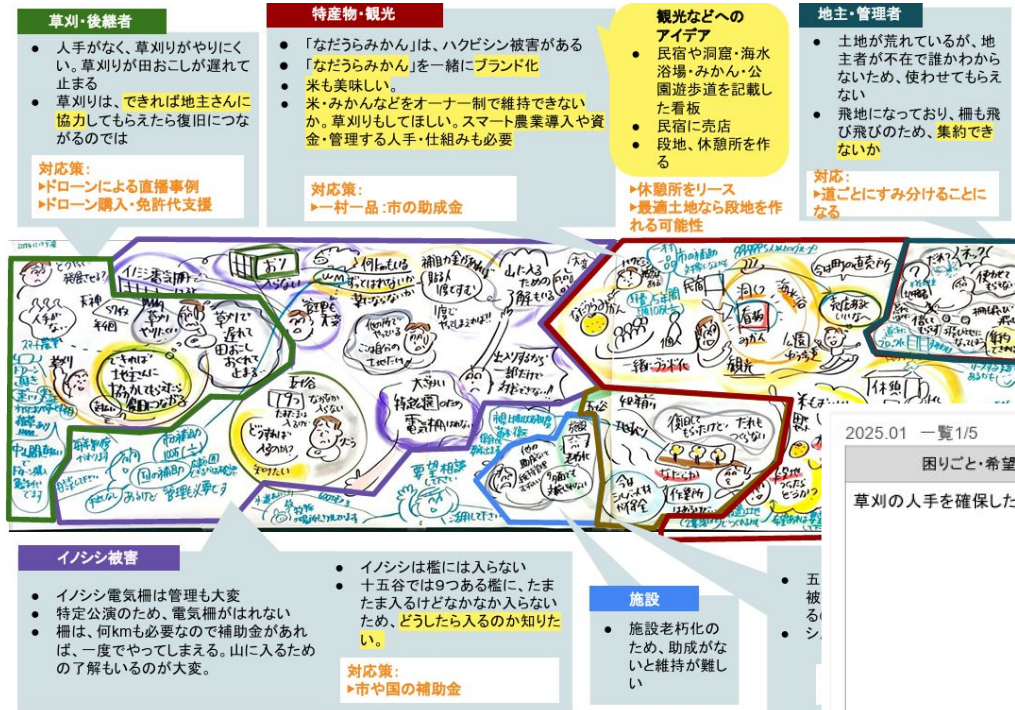
- 集落間で営農体制や課題状況の差が大きい地域では、合同での対話形成が容易ではなく、集落ごとへの個別対応が必要となる場面もあった。
→自治体担当者だけでなく、農業委員や中間支援者の**複数人の運営体制だからこそ柔軟な対応が可能であった。**

検討会③

方向性の検討

目的	<ul style="list-style-type: none">● これまでの検討会で共有・記録した内容を整理し、認識や方向性を確認しながら共通認識を形成する● 地域で挙げた課題に対し、現時点で活用可能な方法や助成制度等の「出口」を整理・共有する● その上で、地域として取り組んでみたいことや、現時点で見えている可能性を言葉にしてみる● 「話し合っで終わり」ではなく、来年度以降も継続的に対話を重ねていくことを確認する
参加者	<ul style="list-style-type: none">● 地域農業者(営農、個人)● 集落をまたいで活動している法人営農● 農業委員・推進委員、県、JA、土地改良区
使用したツール	<ul style="list-style-type: none">● 集合知の整理● 出口事業の共有

発話された事実をもとに課題と可能性、共有された対応策を整理



現時点で活用可能な方法や助成制度等の「出口」を整理

2025.01 一覧1/5

困りごと・希望	対応策(事例)	内容	留意点
草刈の人手を確保したい	グリーンツーリズムとやま農業農村サポーター	・任意のボランティアサポーターによる手伝い募集(県経由?) ・2024年実施予定例添付参照	・参加者の人数は未定 ・参加者の経験は豊富ではない場合がある
	とやま就農ナビへの掲載	富山県内の就農希望者向け情報を一元的に発信するサイト	
	富山あぐりマッチボックス	掲載無料	
	タイミー	掲載無料	
	最適土地事業総合対策 事例: ・速川 ・十二町 ・上市町黒川・砂林開 ・南砺市大鋸屋	・2地区以上における農用地保全に関わるソフトの実証の取り組みに対し、1000万円/年上限×5年間の補助事業(100%) ・50万未満の機器の購入可能 ・取り組み労賃含む	・作付け圃場に対する鳥獣害対策は不可 ・1か所以上の粗放的管理の実証が必要 ・3年目までに方向性策定と土地利用構想の提出が必要(目標地図のようなもの) ・粗放の実証箇所は事業後5年間継続 ・50万以上の機器はリースによる自己負担あり

➡現況地図ならびに「地域農業の現状と課題」「地域農業の将来の在り方」の草案を作成

継続して生まれた状況

- 地域から挙げた課題や要望に対し、直ちに対応可能な施策や支援策が十分に存在するわけではなく、取り組みへの期待感や温度差が見られるなかでの開催だった。
- 一方で、各地区2～3回実施した検討会には、**地域住民が継続的に参加しており、大きな参加離脱は見受けられなかった**。

その後の状況

- 8地区中2地区は、市担当者が話し合いを契機に「地域として次の取り組みにつながる可能性」を感じたうえで実施した。
- その結果、**農村RMO事業の活用に向けた検討が前向きに進められることとなった。**

地域が動く時とは

「地域が動く」とき、その力は地域の中からしか生まれないとしたら・・・

- 私たちが携わる施策は、地域・現場の声と、どこまでつながっているだろうか？
- その中山間地に適した選択肢を、一緒に広げていくために、どんな関わり方ができるだろうか？
- どのような関係性・体制・仕組みが、地域・行政・関係機関それぞれに無理の少ない形で、継続的な話し合いや活動を支えられるのだろうか？

地域が動く時とは(そのためにもっとできれば。。。)

- 「可視化」による共通言語の創出
(農村RMOなどの他施策とのスムーズな接続点に)
- 「話し合い単位」の柔軟な見直し
(集落ごとの個別・分担対応で負荷を分散)
- 「不満に見える声」を地域実態(エネルギー)と捉える
(すぐに解決策へ逃げず、まずは背景を「きき切る」)
- 「中間支援」を交えたチームの結成
(行政・農業委員・JAの担当者を『説明する側』という孤独から解放する)
- 施策を「目的化」させない本質
(進むか、立ち止まるか。地域の人が『自ら考え、選び取れる土壌』をつくる)

中山間地域における地域計画の役割と期待

現在の役割

- ・ **話し合いの土壌づくり**
農業者・行政・JA等が同じテーブルにつく機会の制度的担保
- ・ **担当者同士の知恵の交換**
他市町村との横展開・好事例だけでなく難しさも含めた共有のプラットフォームとして機能を生む可能性

次の可能性(明確になった課題)

- ・ **次世代のみの話し合いの場の設計**
お互いに安心して話し始めるために、まずは既存農業者との切り分けが必要ではないか。本音がこぼれる検討会につなげていく。
- ・ **担当者同士のチーム化の継続**
地域計画を「一回きり」にしない仕組み。多面的な資源、農村地域づくりの観点から定期的なふり返りと知見蓄積が鍵(異動があっても引き継がれる仕組み化)

ご清聴ありがとうございました。

一人ひとりが輝く土壌をつくる

私たちは一人ひとりが輝く土壌（社会）をつくり、
すでにあるヒト・モノ・コトを生かして、新しい価値を
生み出す伴走型のパートナーです。



たがやすWebサイト



グラフィックファシリテーション
に関心のある方（学びの場）

